

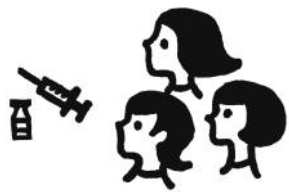
国立がん研究センターと国立成育医療研究センターの集計によると、15歳から39歳までのAYA世代と呼ばれる層では女性のがん患者が非常に多く、特に20歳以降は約8割の患者が女性です。子宮頸(けい)がんや乳がんが若い世代に多いためです。

3月、女性の健康情報サーブिस『ルナルナ』と一般社団法人シンクパールは「女性とがんの関係についての調査結果」を公表しました。

乳がん、子宮がん、卵巣がんなど、女性特有のがんがあることは9割以上が知っていました。しかし、20〜30代のがん患者の約8割が女性であることを知っている人は2割以下という結果でした。

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

予防へ正しい知識の啓発を

費助成)で受けられることを

認識している人は約2割で、「どのように定められているかわからない」が4割強と最も多い回答でした。自治体が行っているHPVワクチンの取組も約9割の女性が知らないという結果となりました。

ワクチンを接種していない最大の理由は「ワクチンがあることを知らなかった」(37

子宮頸(けい)がんの治療

についても誤解がありました。欧米では、手術以上に放射線治療が実施されていますが、放射線だけで治せることを知っている人の割合はたった1・7%にすぎませんでした。

子宮頸(けい)がんは30代に最も多いがんですが、早期に発見できれば治りやすいがんです。ワクチン接種でリスクは3割程度まで下げられます。一時8割を超えていた接種率は今やほぼゼロ。子宮頸がんの9割を防げる「9価ワクチン」も認可されましたが、現在の日本の状況では、定期接種化にはもう少し時間がかかる予想されます。

(東京大学病院准教授)

子宮頸(けい)がんの感染経路のほとんど100%が

「性交渉」であることの認知率は6割で、4割の人が感染経路を理解していませんでした。がん予防のためにもより

正しい知識を啓発する必要性を感じます。

また、子宮頸(けい)がんを予防するHPVワクチンについての理解も進んでいません。ワクチンが定期接種(公

%)で、次いで「接種後の副反応が心配だから」(33%)

でした。HPVワクチンの接種について正しい知識を持っておらず、判断できる環境にないことがうかがえます。